

幻の国境線：廣瀬文庫『背振山堺図』とその周辺

山根，泰志
九州大学附属図書館図書館企画課企画係

<https://doi.org/10.15017/1470700>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2013/2014, pp. 32-45, 2014-10. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

報告

幻の国境線
— 廣瀨文庫『背振山塚図』とその周辺 —

山根 泰志[†]

<抄録>

九州大学附属図書館所蔵廣瀨文庫に、現在の福岡県と佐賀県の県境にある背振山における国境を巡って、筑前（福岡藩）と肥前（佐賀藩）が争った際に作成された背振山の絵図（『背振山塚図』）が所蔵されていることが判明した。本稿では、『背振山塚図』の概要等を報告するとともに、その他の廣瀨文庫絵図類も併せて紹介する。

<キーワード> 廣瀨文庫, 黒田家文書, 福岡藩, 佐賀藩, 江戸城, 長崎警備, 地域史, 建築史

Boundary Dispute between Chikuzen and Hizen : A Boundary Map of Mount Sefuri and the Related Materials in Hirose Collection

YAMANE Yasushi

1. 『背振山塚図』について

1.1. 発見経緯

九州大学附属図書館所蔵廣瀨文庫は、明治～大正期に出雲大社教福岡分院（福岡市荒戸町 71 番地、戦後移転）の境内に設置されていた私立福岡図書館（1902～1917、館主廣瀨玄銀）の旧蔵書を中心とし、大正 14（1925）年に廣瀨家と九州大学との間で寄託契約が成立し、昭和 17（1942）年に延長された後、昭和 22～23 年度に売買契約が成立し、附属図書館の所蔵に帰した¹。本館（旧保存図書館、現記録資料館書庫）が竣工したばかりで、書庫もがら空きだった附属図書館の基盤となった文庫であり、貴重な文献も少なくないが、中央図書館内に混排されており、冊子体の目録（『廣瀨文庫假目録』）も書名・点数のみの棒目録で、文庫全体を把握することは難しかった。そこで、受入手続きが完了した図書の備品番号・書名・数量・金額・受入日・納入者等を記載した『九州帝国大学附属図書館原簿』の情報を総合目録カードの情報を追加したものを公開していたが²、現物を確認していないので、一点一点がどこに排架されているかまでは明確ではなかった。筆者が図書目録係配属時に、廣瀨文庫のうち、NACSIS-CAT へのデータ登録が完了していない和漢古書を中心に現物を確認していたところ、保存書庫に、箱の背タイトルには『花洛往古圖』（663/カ/8）となっているが、その同じ箱の中に、さまざまな地図・絵図類が一緒に収納されている資料群を見つけた。総合目録カードには下記のようになっている。

書名：花洛往古圖

数量：16

装丁・大小：和 折 大

請求記号：663/カ/8

文庫名：廣瀨文庫

金額：500 [円]

受入日：24.2.17[1949 年 2 月 17 日]

備品番号：180715

同帙

第二 豊後國石垣原之圖 寫

第三 肥州長崎圖 安永七年

第四 懷寶御江戸繪圖 文化十一年

第五 新選京繪圖 文久三年

第六 東京御繪圖 明治八年

第七 寛文年間福岡士官宅地之圖 寫

第八 京都繪圖

第九 大内裏御圖

第一〇 御守殿[殿守の誤]百分一之圖 寫

第一一 御即位儀式紫宸殿圖 寫

第一二 長崎港外香焼島附近地圖 寫

第一三 背振山塚圖 寫

第一四 關原御陣地圖 文化二年

大阪御仕寄場圖 文化二年 寫 二枚

この内、第三の『肥州長崎図』は現物が確認できず³、第一二の『長崎港外香焼島附近地図』と第一三の『背振山塚図』は、箱に「大別置ニアリ」と注記されており、同じ箱に含まれていなかった。別置書架等を搜索したが見つけることができなかった。

筆者が企画係に異動後、2013 年 11 月 28 日、保存書

[†] やまね やすし 九州大学附属図書館図書館企画課企画係 E-mail: yamane.yasushi.188@m.kyushu-u.ac.jp

庫の大型資料の書架にて移転準備作業中に、他の資料の中に埋もれていた「長崎港外香焼島附近地図并背振山境界之圖」と書かれた封筒を偶然発見、中に『長崎港外香焼島附近地図』と『背振山堺図』が入っていることが確認された。

1.2. 『背振山堺図』概要

附図1に写真を掲載し、「九大コレクション」貴重資料でも閲覧可能である。折図1 鋪（縦114.8×横133.3cm）。標題はなく、『背振山堺図』は目録カード作成時の仮題と思われる。背振山を中心とする絵図であり、肥前国境筋（朱）、筑前国境筋（浅葱）、道筋（赤）、水筋（紺）、蒸炭竈跡（紫黒）、鑄師炭竈跡（紅）が色分けされて描かれている。また、地名も肥前側と筑前側でそれぞれ色分けがなされている。絵師として下記の署名と印がある。

「肥前国繪師 玄偲[印]

筑前国繪師 長吉[印]

天和から元禄年間にわたって、筑前国早良郡板屋・脇山・椎原村百姓と肥前国神埼郡久保山村百姓との間で、背振山頂の上宮弁財岳から南側の土地を巡って国境争論が起り、筑前福岡藩と肥前佐賀藩が折衝したが折り合いがつかず、幕府の評定所における裁判へと発展した⁴。公判前の元禄5（1692）年9～10月に、背振山にて筑前側・肥前側双方の立会いの下、幕府に提出するための相絵図と山形（立体模型）が作成されているが、「玄偲」と「長吉」はその相絵図を作成した絵師である⁵。

幕府の評定所での裁判では、国境線の妥当性（肥前側が、山は峰、谷は川筋に沿う線としているのに対し、筑前側が、山は半腹を通り、谷は川筋を横切る線としていた）や、炭焼きをしていた証拠として炭竈跡の場所等が争点となったが、本図の色分けはそれを反映するものである。裁判で問題になった畠や古田、金堀跡の場所も描かれている。また、裁判では、双方が同意した仕儀は墨で書付け、双方が同意しなかった仕儀は、互いに境筋色にて書付けると説明されているが、本図では、筑前側の呼称する地名は白色、肥前側の呼称する地名は朱色、双方の呼称が一致している地名は墨で書付けられている。

相絵図は双方の絵師が片峰ずつ作成するもので、最終的に相手方の絵師も参加して判形する。本来2枚の相絵図を幕府に提出することになっていたが、筑前側が論地を色分けした「ひしき書三色濃分之絵図」にて作成するよう主張し、肥前側が納得しなかった。そこで、肥前側玄偲が主で作成した「片峰書一色之絵図」と、筑前側長吉が主で作成した「ひしき書三色濃分之絵図」を、それぞれ双方が吟味して判形し、前者を先

に幕府に提出することになり、提出する相絵図が1枚であり2枚にならないという証文を取り交わした。筑前側長吉が主で作成した「ひしき書三色濃分之絵図」は、別途筑前側が評定所に持参したが、元禄5年11月25日の第1回公判では何度も役人に提出しようとするも、結局受領されなかった⁶。

相絵図の作成を巡って、筑前側と肥前側で見解が分かれていたことが窺えるが、本図には裏書等がなく、どの段階の絵図かは不明である。とはいえ、本図は元禄5年9～10月の相絵図作成時に、背振山にて作成された立会絵図の一つと考えられ、係争中に作成された一次史料として極めて貴重である。

1.3. 黒田家文書『背振山論所御裁許之絵図』との比較

幕府に提出した福岡藩作成の正保絵図に背振山が記載されていなかった等の理由により、肥前側の主張を全面的に認めた幕府の裁定が下った元禄6（1693）年10月12日、幕府作成の裁許裏書絵図が筑前側・肥前側双方に下付された。附図2に写真を掲載した福岡市博物館所蔵黒田家文書『背振山論所御裁許之絵図』（203、縦230.7×横302.0cm⁷）はその時の裁許裏書絵図であり、同館企画展示「背振山の歴史と文化」（2003年11月26日～2004年1月25日）でも展示されている。

元禄6年6～7月、裁定の前に幕府境目検使による現地の検分が行われ、その結果をうけて、7月11日に検使付町間絵図調加瀬十兵衛作成の山絵図が完成し、双方が判形している。裁許絵図である『背振山論所御裁許之絵図』はその検分絵図を反映しているはずだが、『背振山堺図』と構図が大きく変わっておらず、幕府が『背振山堺図』と同様の立会絵図を踏襲して絵図を作成したことが窺える。両図の主な違いは下記の通りである。

・国境線

『背振山論所御裁許之絵図』には裁許線として肥前側の主張した国境線のみ描かれ、裁許線上には評定所奉行の押印がある。

・地名

『背振山堺図』に記載された筑前側の地名は『背振山論所御裁許之絵図』には記載されていない。筑前側と肥前側で地名の呼称が異なる場合は肥前側の地名のみ記載している。なお、『背振山論所御裁許之絵図』は村名を小判状の枠の中に記載している。

・色分凡例

『背振山論所御裁許之絵図』の色分けは、『背振山堺図』のそれとほぼ一致するが、『背振山堺図』に記載される色分凡例が、『背振山論所御裁許之絵図』には記載されていない。ただし、『背振山論所御裁許之絵図』にも元々あったが、脱落した可能性がある。

- ・地点間の距離

『背振山塚図』は、脇山村から頂上の上宮弁財岳まで、久保山村から三ツ渡瀬まで等、地点間の距離が記載されているが、『背振山論所御裁許之絵図』には記載されていない。

- ・樹木の描写

『背振山塚図』には、頂上の上宮弁財岳から東南へ延びる稜線と板屋村の間に樹木が描かれている。『背振山論所御裁許之絵図』にも微かにそれらしいものが見えるが不明確である。裁判では、頂上の上宮弁財岳から南の牛宮谷・花木原・魚釣谷あたりに、炭を焼くための樹木がいつまで残っていたかが争点となった。

- ・背振山中宮霊仙寺・下宮修学院の描写

背振山中宮霊仙寺・下宮修学院について、『背振山塚図』は、「背振山中灵[霊]仙寺」（中宮を示すと思われる「中」は肥前側の境筋色で小さく補記）と頂上の上宮までの距離のみ記載されているが、『背振山論所御裁許之絵図』は下宮修学院まで、文字だけでなく、山・建物まで描写されている。裁判では、佐賀藩が上宮・中宮・下宮等への寺領の寄進、造営、修理等をしていったことが、肥前側勝訴の根拠の一つになった。

以上のように、立会絵図である『背振山塚図』と裁許絵図である『背振山論所御裁許之絵図』を比較することにより、両者の性格の違いや争論の過程を窺うことができるだろう。なお、『背振山論所御裁許之絵図』は虫損・破損等により、『背振山塚図』は褪色等により、それぞれ文字が判読し難い部分があるが、双方により補い合うことができる。

『背振山論所御裁許之絵図』の天保 9（1838）年の裏書に、佐賀藩に渡された裁許絵図が焼失したため（二の丸御殿を焼失した天保 6 年の佐賀城大火災が原因と思われる）、福岡藩の絵図を佐賀藩が写した旨の記載がある。ところが、現在鍋島家文庫で『背振弁財岳公事裁許絵図』として紹介されている絵図（『佐賀県立図書館蔵古地図絵図録』所収、縦 111×横 228cm）は、『背振山論所御裁許之絵図』ではなく、同じ黒田家文書の『筑前国肥前国境取替際絵図』（起こし立て絵図、212、縦 112.5×横 234.2cm）とほぼ同じ絵図である。元禄 10（1697）年、幕府は諸藩に国絵図作成を命じ、隣国との国境の相互確認を義務付けた⁸。『筑前国肥前国境取替際絵図』は、「元禄十四年 筑前国肥前国境取替際繪圖」と記載された包紙に収納されており、国絵図作成の際に佐賀藩と取り交わされた国境絵図と考えられる。『筑前国肥前国境取替際絵図』は国境線上に押印があり、鍋島家文庫の絵図にはないことから、後者は前者の写しと考えられる。それが元禄 6 年の裁許絵図に誤認された理由は不明である。

1.4. 廣瀬文庫と黒田家関係資料

『背振山塚図』の伝来については、争論に関わるものとして『背振山論所御裁許之絵図』と一括されて藩ないし黒田家にて保管されていた可能性がまずは考えられる。廣瀬文庫には、黒田家由来と推定される絵図として、天和二（1682）年『御国絵図』がある。福岡市博物館所蔵黒田家文書の元禄十二年『御国分間絵図』の包紙に「天和二年 御國繪圖 壹枚」と記されていることから、この袋は本来廣瀬文庫の天和二年『御国絵図』が収められていたことが推定されている⁹。しかし、廣瀬文庫には、『黒田御用記』（黒田家臣の古記録の写、九州史料叢書所収）等、黒田家関係資料は数多く含まれているが、幕末明治の福岡を代表する国学者で、福岡図書館設立の中心人物の一人でもある江藤正澄（1836～1911）から福岡図書館に寄贈されたものが多く¹⁰、実は黒田家由来と思しき記録・文書類は積極的には認められないのである¹¹。

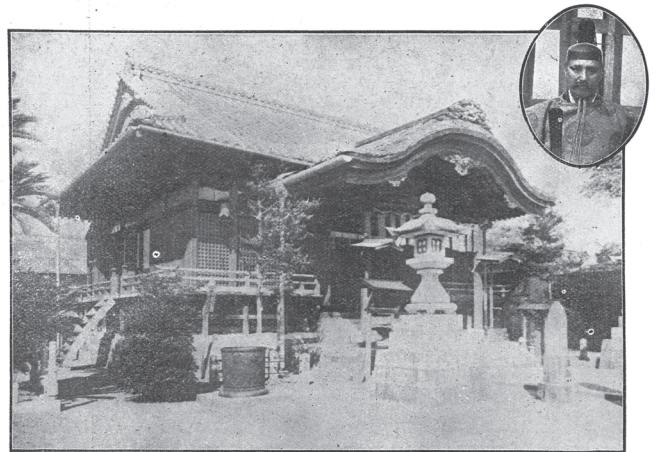


図1 出雲大社教福岡分院と廣瀬玄銀
（『福岡県官民肖像録』）



図2 福岡図書館

（明治 44 年 1 月 1 日消印付絵葉書）

福岡図書館開館を報じた『福岡日日新聞』（明治 35 年 10 月 15 日）の「福岡図書館設置の顛末」によれば、出雲大社教福岡分院長の廣瀬玄銀（1855～1916）は、福岡図書館設置のため、明治 33（1900）年上京して黒

田家等福岡出身の有力者の間を奔走して尽力を請い、黒田家より13部370余冊の寄贈を得たとある。廣瀬文庫の和漢古書より、「黒田蔵書」の蔵書印¹²が捺された図書を抽出したところ、下記の通りである。

- 123/タ/2 『大学衍義』 20冊
 - 123/リ/2 『劉向説苑纂註』 10冊
 - 205/シ/9 『貞観政要』 10冊
 - 210/ハ/2 『万国公法』 6冊
 - 521/コ/15 『康熙字典』 40冊
 - 565/ソ/29 『評註續文章軌範』 3冊
 - 565/フ/12 『評註文章軌範』 3冊
 - 610/コ/8 『国史略』 5冊
 - 610/タ/4 『大日本史』 100冊
 - 631/コ/2-B 『国語定本』 6冊
- 計10部203冊

『福岡日日新聞』に記載された数には足りないため、これで全部ではないだろうが、いずれも図書館の基盤となるべき基本文献で、記録・文書類はやはり見受けられない。

『背振山塚図』と天和二年『御国絵図』には、福岡図書館の蔵書票や蔵書印が認められず、福岡図書館の蔵書目録にもそれらしい絵図は記載されていないので、福岡図書館の蔵書として受入、管理されていたものではないと思われる。この点から見ても、両絵図は廣瀬文庫中では異質な資料であり、廣瀬家に伝わった経緯については今後の検討課題である¹³。

福岡藩の記録・文書類は、廃藩後も黒田家に管理され¹⁴、維新後の黒田家の東京移住に伴い、多くは東京の黒田邸に移され、地元福岡には、浜の町の黒田家別邸に保管され¹⁵、その一部は、福岡藩祖黒田孝高・長政を祀る西公園の光雲神社に収蔵されていた¹⁶。福岡藩や藩校修猷館の蔵書は廃藩時に県庁に納入された後、1873年に売却された¹⁷。1945年6月19日の福岡大空襲により、黒田家別邸、光雲神社、出雲大社教福岡分院、福岡県立図書館（天神2丁目）が焼失し、福岡市通俗博物館の収蔵品（福岡図書館から移管された古器物類を含む）が疎開先で全焼するなど、福岡に残っていた福岡藩関係資料は壊滅的被害を受けた。東京赤坂の黒田邸でも、什宝類を納めた六棟の蔵のうち、最重要品のみを集めた一号蔵以外は全焼した¹⁸。福岡藩関係資料の多くが失われた中で、『背振山塚図』と天和二年『御国絵図』は、奇跡的に今日までに残った絵図だと言えるだろう。

1.5. 埋もれていた理由

『背振山塚図』は、廣瀬文庫寄託の際に作成された『廣瀬文庫假目録』には「古地図 一五」（「花洛往古図 1324」と書入れ）としか記載されておらず、寄託

時から『花洛往古図』等と一緒にされていたようである。これら絵図類のうち、『花洛往古図』・『御殿守百分一之図』・『御即位儀式紫宸殿図』は江藤正澄から、『関原御陣地図』・『大阪御仕寄場図』は福岡の医家山崎家¹⁹から福岡図書館に寄贈されたものであることから、一緒にされていたのは伝来とは無関係である。『長崎港外香焼島附近地図』と『背振山塚図』以外は全て小型の絵図だが、廣瀬文庫には他に小型の絵図がないので、一つ一つ仮目録に記載するには煩雑な小型の絵図と、標題がないため仮目録に記載しにくい『長崎港外香焼島附近地図』と『背振山塚図』を「古地図」として一緒にしたものと思われる。一緒にされていたため、冊子体の学内総合目録である『九州帝国大学図書目録』にも「花洛往古図 外13冊 693[663の誤]カ/8」としか記載されておらず、『国書総目録』にも収録されなかった。その存在を示すものは、前掲の総合目録カードだけである。

天和二年『御国絵図』については、法文学部国文学研究室編集の短歌雑誌『能古』の昭和4（1929）年4月号（創刊号）から7月号の表紙に使用され、1930年の「九州沖縄地理風俗図書展覧会」や、1931年の「福岡県管内郷土過去現代文献展覧会」（いずれも福岡県立図書館主催）でも、他の九州大学所蔵の郷土資料とともに出品されているが、『背振山塚図』は一級の郷土資料にも関わらず出品されていない。『背振山塚図』は、寄託から間もない段階で、存在が知られることなく埋もれていた可能性がある。

1.6. 『脇山村史』について

『背振山塚図』の調査のため、関係資料を捜索中、福岡市内の古書店で売りに出されていた『脇山村史』稿本を偶然発見、2014年3月中央図書館にて購入した。

10冊。1938年、町村制発布50周年を記念して、脇山村長馬男木榮太氏から村史の編纂を委嘱された脇山尋常高等小学校長の伊豆利一氏が学校職員で分担して脇山村に関する資料を蒐集、収録したものである。私見を交えない資料集の体裁を採用した。「脇山村史」の原稿用紙を使用したペン書きの稿本であり、序文によれば、1940年3月末に一応完成し、郷土史家伊東尾四郎（1869~1949）の序文も附すが、刊本は確認できず、出版には至らなかったと思われる。

後に筑前側の視点で記録された史料として注目される馬奈木文書『筑前脇山大庄屋次兵衛記録』をはじめ、筑前側・肥前側双方の背振山国境争論関係史料を数多く収録し、刊行されていれば当該研究の基礎資料となっていたと思われる。その中でも特に重要なのが、戦災で失われたと思われる福岡県立図書館所蔵の『背振山境争論記』を収録（一部省略）していることである。

また、10冊目には、裁判で問題になった場所等を、現地の人聞き取りや写真により説明しており、大正時代の地図により場所を示しているため、係争地の復元にも重要な資料となる。

1.7. 背振山国境争論関係主要史料

背振山国境争論についての史料で、管見に入ったものについて簡単に紹介し、『背振山塚図』の史料の価値を確認したい。

【肥前側作成史料】

・『肥前脊振弁財嶽境論御記録』・『附録』（元禄～享保頃編纂、佐賀県立図書館）

背振山国境争論について、佐賀藩がまとめた詳細かつ膨大な記録で、相絵図作成の経緯についても最も詳しく記述されている。佐賀県立図書館「古文書・古記録・古典籍データベース」にて閲覧可能。

・『寛元事記』（18世紀編纂、『脇山村史』・『佐賀県近世史料』所収）

・『光茂公譜考補地取』（天保15年編纂、『佐賀県近世史料』所収）

佐賀藩2代藩主鍋島光茂(1632～1700)の年譜史料。背振山国境争論については、『肥前脊振弁財嶽境論御記録』・『附録』を多く利用しているが、相絵図作成の経緯については大幅に省略されている。

・『筑前對肥前弁財嶽公事裁判絵図』（鍋島家文庫、『脇山村史』・『脊振村史』所収）

大正9(1920)年3月永渕一正より寄贈されたもので、裁許絵図の「表境筋判形之次第」と裁許裏書の写しを記録したもの。絵図はない。

・『為實實之宣之惟之伝記』（佐賀県立図書館所蔵石田家資料、『佐賀県近世史料』所収）

作り庄屋として久保山村庄屋五左衛門に仮装し、肥前側の代表として評定所に出廷して弁論に努めた佐賀藩士石田惟之(1633～1701)²⁰の伝記を収録。「古文書・古記録・古典籍データベース」にて閲覧可能²¹。

【筑前側作成史料】

・『黒田新統家譜』（18世紀編纂、『新訂黒田家譜』所収）

福岡藩4代藩主黒田綱政(1659～1711)の年譜史料。背振山国境争論について簡単にまとめている。

・『背振山境争論記』（佚、『脇山村史』所収）

争論の始まりから幕府裁定までを筑前側の視点でまとめたもの。福岡県立図書館に所蔵されていた（県立

図書館請求記号：1-075-39）が、戦災で失われたと思われる。『脇山村史』の伊豆の附記によれば、葉数71枚より成り、奥書はなく、大正10(1921)年12月29日上野端彦氏寄贈という印が押捺していたとのことで、上野端彦氏は福岡藩士上野就賢(1812～1897)の自筆本・旧蔵書を福岡県立図書館に寄贈していることから²²、本書も就賢旧蔵と思われる。

・『筑前脇山大庄屋次兵衛記録』（馬奈木文書、『脇山村史』・『筑肥国境脊振山争論文書』所収）

筑前側当事者の一人であった、脇山村庄屋馬奈木次兵衛の文書。天和年間から元禄末年までの紛争の実情を記録している。

・『背振山記』（貝原益軒著、元禄4年成立、古河正虎写、榎田神社所蔵）

福岡を代表する儒学者である貝原益軒(1630～1714)は、今年没後300周年ということで改めて注目されているが、この争論に深く関与しており²³、藩命により背振山が筑前国であるとする証拠資料蒐集に従事し、それをまとめたのが『背振山記』である。福岡藩士の古河藤九郎正虎が、益軒自筆本を写して文政5(1822)年に榎田神社に奉納している。福岡市総合図書館にてマイクロフィルムが閲覧可能である²⁴。

益軒には他にも、調査報告である家老立花実山宛書翰(『益軒資料』五所収)や争論についての見解を示した『筑前国統風土記』(宝永6年成立)早良郡背振山の項等がある。



図3 桑木文庫『益軒翁畫像』（貝原家所蔵の益軒像の複製）

・『背振山上宮出入深田民部諸所参万覚日記』（自貞享4年至元禄5年、元禄14年2月抜書）

・『背振山上宮出入二付深田民部京江戸其外所々ニ被指立候往来日記』（自貞享4年至元禄6年、文政2年4月深田遠江守写）

・『筑前国背振山古証文為見合古代諸所之抜書』（元禄2年6月19日、『背振山背振神社之事』と合綴、以上

東京大学史料編纂所謄写本)

宗像神社祀官の深田民部秋続(1635~1713)は、争論時に筑前社人頭を務め、益軒同様藩命により背振山が筑前国であるとする証拠資料蒐集に従事し、江戸に赴き訴状を提出した一人にもなった²⁵。その深田秋続が争論時に書いた日記・記録で、『背振山上宮出入ニ付深田民部京江戸其外所々ニ被指立候往来日記』については福岡市博物館所蔵山崎家資料にも写本がある。

1938年、東京大学史料編纂所が宗像大社宮司宗像辰美氏所蔵文書により謄写本を作成しており、史料編纂所の「所蔵史料目録データベース」にてイメージ画像を閲覧可能である。なお、宗像辰美文書は現在宗像大社に奉納されている²⁶。

以上のように、現在確認される背振山国境争論関係史料は幕府裁定後に編纂された史料、つまり肥前側が勝利したという事実を前提に編纂された史料がほとんどであり、係争中の一次史料は積極的には認められない。また、絵図類は、前述のように裁許絵図として誤認されてきた鍋島家文庫の国境絵図のほか、図4のような筑前国郡図に含まれる早良郡図や『神埼郡図』(明治前期、佐賀県立図書館所蔵、古地図・絵図データベース収録)等がこれまで利用されていたが、いずれも簡略なため係争地の復元には限界があった。『背振山塚図』により、境界についての双方の主張や係争地の位置が一目で把握することが可能となった。

また、背振山は、信仰の対象として、軍事的要衝として古くから重視されてきたが、江戸時代における背振山そのものの景観を描いた絵図としても貴重であり、文献史学だけでなく、考古学、美術史学、民俗学など、今後様々な学問分野からのアプローチが期待される²⁷。



図4 逍遙文庫『筑前国各郡地図』早良郡

2. 廣瀬文庫の絵図類

廣瀬文庫は附属図書館の基盤となった蔵書であり、寄託されてから90年が経とうとしているが、『背振山塚図』のように、貴重な絵図でありながら、利用者に知られていないものも多い。そこで、その他の主な手書絵図類を紹介し、多様な廣瀬文庫の世界の一端を伝えることとする。

2.1. 『御殿守百分一之図』(663/カ/8)

折図1 鋪 (縦 105.3×横 52.7cm)。『御殿守百分一之圖』と墨書された題簽に江藤正澄の「江藤文庫」の印があり、表紙には福岡図書館の蔵書票と蔵書印があるので、江藤正澄より福岡図書館に寄贈された図書の一つである²⁸。「九大コレクション」貴重資料で閲覧可能である。

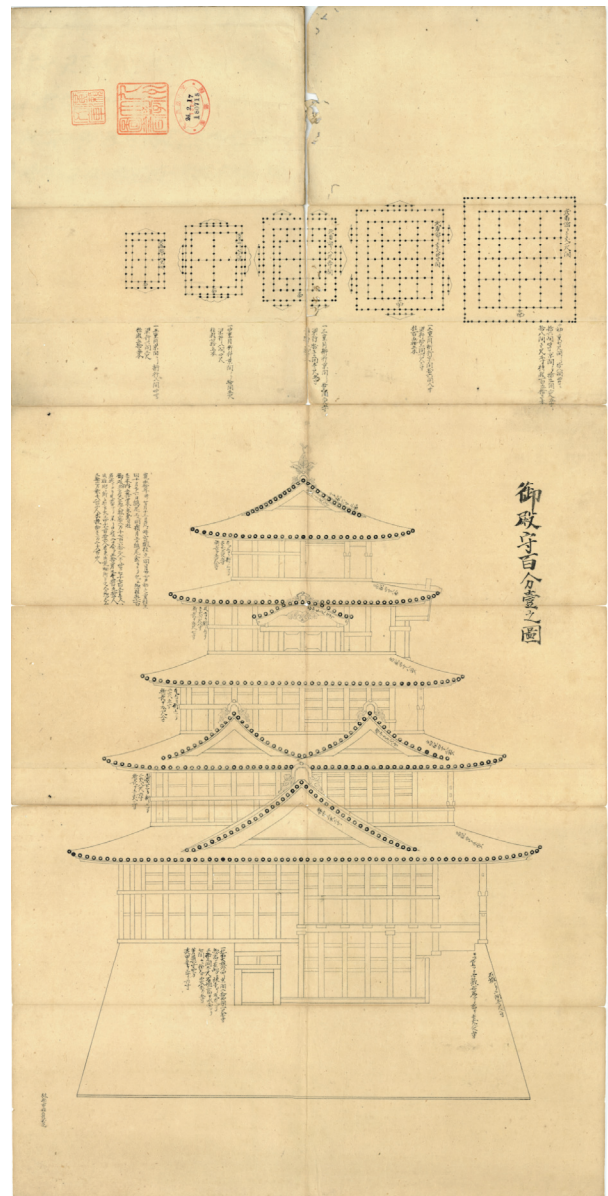


図5 『御殿守百分一之図』

明暦 3 (1657) 年の大火で焼失した江戸城寛永度天守閣の、正面からみた天守の構造を示す図と各階の平面図からなる。唯一の寛永度天守閣に関する確かな資料として重視されている、東京都立図書館所蔵甲良家文書『江戸城御本丸御天守百分之一建地割』²⁹に近く、記載事項も一致する所が多いが、主な違いとして下記のようなものがある。

	『江戸城御本丸御天守百分之一建地割』	『御殿守百分之一図』
標題	江府御天守圖百分之一	御殿守百分壹之圖
工事日程の記載	寛永十五年	寛永拾年
	御柱立	柱立
	鴟吻	鴟尾
総柱数	七百本	七百老本
木挽数	十万二千八百〇四人半	拾壹万二千八百四人
平面図二重目	桁行京ま拾六間 梁間[京ま]拾四間	桁行京間拾六間八寸 梁行拾三間六尺三寸 ³⁰
平面図一重目	桁行京ま拾九間貳尺九寸 梁間[京ま]拾七間壹尺九寸	初重ハ七尺間ニテ拾八間四寸ニ 拾六間四寸京間ニテ拾九間二尺九寸ニ 拾八間壹尺九寸
	武者走り壹丈四尺貳寸	武者溜り壹丈二尺間
鴟吻(尾)	小さい	大きい
屋根	内部が描かれている	軒丸瓦の位置が描かれている
破風	装飾がない	装飾がある
三重目高さ	桁上ハヨリ瓦上ハ迄壹丈九尺七寸	瓦上ヨリ桁上マテ二丈五寸
二重目高さ	桁上ハヨリ瓦上ハ迄貳丈〇五寸	土臺下ヨリ桁ノ上マテ二丈八尺六寸
二重目破風腰巾	壹尺九寸	壹尺八寸
一重目破風腰巾	貳尺五寸	二尺二寸

その他、一方にあって一方にない記載も多く、『御殿守百分之一図』は、『江戸城御本丸御天守百分之一建地割』とは別の絵図を写したものと考えられる。奥書に「林助市矩貞寫之」とあるが、「林助市矩貞」は幕末における福岡藩の大工棟梁の林家の人物であり³¹、書写年もその頃であろう。林矩貞がどこでどのように原図を見ることができたのかは興味深いところであるが、江戸幕府作事方大棟梁の甲良家³²が作成した控えである『江戸城御本丸御天守百分之一建地割』と幕末における写しである本図とは書写目的や書写年代において隔たりもあり、単純に比較できないため、史料的価値・性格については今後の検討課題である。なお、林助市家の分家である林助四郎家の文書である林(美)文書(九州歴史資料館所蔵)にも、万治度の江戸城本丸の表御殿を示す絵図(史料番号 53「[江戸城本丸表御殿絵図]」)が含まれている³³。

2.2.『寛文年間福岡士官宅地之図』(663/カ/8)

折図 1 鋪 (縦 78.5×横 81.8cm)。図の右下に「寛文年間 (1661~1672) 福岡士官宅地之圖」という標題があるが、書写年代はかなり下るものと思われる。裏面

に福岡図書館の蔵書票と蔵書印があり、福岡図書館の目録にも記載されている。「九大コレクション」貴重資料で閲覧可能である。

東は那珂川、西は唐人町、南は六本松付近までを描いた絵図で、侍屋敷の区画を示し、居住者の姓名を記している。小林茂・佐伯弘次「近世福岡・博多市街絵図—公用図について—」(『歴史学・地理学年報』16, 1992, 後『福岡平野の古環境と遺跡立地』に収録)に紹介され、福岡県立図書館所蔵大田資料『福岡城下屋敷図』とともに、近世前期の福岡の屋敷割りを示す図として注目されている。



図 6 『寛文年間福岡士官宅地之図』

2.3.『長崎港外香焼島附近地区図』(663/カ/8)

折図 1 鋪 (縦 305.4×横 161.3cm)。標題・奥書はなく、『長崎港外香焼島附近地区図』は目録カード作成時の仮題と思われる。福岡図書館の蔵書票と蔵書印が認められず、福岡図書館の目録にもそれらしい絵図が見当たらない。

長崎港外の香焼島を中心として、佐賀藩(松平肥前守=鍋島齊直)領小ヶ倉村と大村藩(大村上総介=大村純昌)領戸町村の境界から伊王島までを描いた絵図で、台場間の距離や海峡の深さ等が記載されている。文化 5 (1808) 年のフェートン号事件後に設置された高鉾台場や陰ノ尾台場の新台場が青色で描かれているが、文化 7 年に長刀岩台場等に増設された増台場が見えないことから、1808~1810 年の長崎港外の状況を反映した絵図と思われる。



図7 『長崎港外香焼島附近地図』

2.4. 『江戸ヨリ長崎迄』(663/エ/5)

軸1巻(39.8×995.4cm)。標題・奥書はなく、『江戸ヨリ長崎迄』は目録作成時の仮題と思われる。改装のため当初の装丁は失われ、「廣瀬文庫」の文庫印すら見えないが、改装前にマイクロフィルムが1978年10月に作成されているので、紙焼きにより確認したところ、福岡図書館の蔵書票と蔵書印が認められず、また、福岡図書館の目録にもそれらしい絵図が見当たらない。「九大コレクション」貴重資料で閲覧可能である。

江戸より長崎までの陸路・海路を描く道中絵巻で、陸路は黄線で描かれ、海路は朱線で描かれている。各地に藩主や城代等を書いた紙が貼り付けられており、その在任期間によれば、元禄5(1692)年頃の状況を反映している³⁴。本図は、前述の「九州沖縄地理風俗図書展覧会」のほか、九州帝国大学創立記念供覧(1935)、長崎高等商業学校創立三十周年記念「貿易交通文化史料展覧会」(1935)等、戦前の展示会ではしばしば出品されている。



図8 『江戸ヨリ長崎迄』九州附近

2.5. 『大日本帝国六十余州之図割図』(672/タ/5)

折図50鋪。「大日本帝國六十餘州之圖割圖 模寫 惣数 五十枚 明治十年後於福岡講之 圖画年代未詳 或文化天保頃歟」という墨書と「江藤文庫」の印が捺された紙が原帙に貼付されている。江藤正澄が貼付し

たものと思われるが、原帙の裏に「文化十二乙亥年中冬於東都寫之 大賀茲敏」とあるので、本図は文化12(1815)年に江戸で写されたもののようだが、江藤がなぜ「図画年代未詳」としたのかは不明である。標題は江藤が付与したか、明治以降に与えられたものであろう。福岡図書館の蔵書票が貼付されており、福岡図書館の目録にも記載されている。

日本全国を50枚の絵図に分割したもので、国名を黒枠・長方形の枠の中に記載し、国境線は黄色、郡境線は黒色で、郡名とそれに属する村数を併記し、村名は省略されている。道は朱線で描かれ、城址は三角形で、居城は朱塗りの方形で表現され、藩の規模に応じて大きさや円形に変える等で描き分けられている。



図9 『大日本帝国六十余州之図割図』
筑前国筑後国肥前国豊前国

2.6. 所在不明の絵図

標題は興味深いのが、残念ながら現物が見当たらない絵図として、『経絡及骨度之図』と『名島城址之図』がある。いずれも福岡図書館の目録に記載されており、『名島城址之図』は前述の「九州沖縄地理風俗図書展覧会」に出品されている。将来的に発見されることを期し、それぞれの総合目録カードの情報を示す。

書名：経絡及骨度之図

数量：1

著者：景雲齋書

年代：寶曆四

装丁：軸

請求記号：911/ケ/1

文庫名：廣瀬文庫

寄託契約日：14.12.1[1925年12月1日]

廣瀬文庫通し番号：1334

書名：名島城址之図(写)

数量：1

装丁・大小：和 折 小

請求記号：680/ナ/10

文庫名：廣瀬文庫

金額：300[円]

受入日：24.2.17[1949年2月17日]

備品番号：181073

3. おわりに

前述のように、維新後の混乱と戦災などにより、福岡にあった図書・記録・文書類の多くが失われた。その中であって、旧藩士の家に残されていた蔵書等から、多様な分野にわたる貴重な文献を蒐集し³⁵、福岡の知の基盤となった福岡図書館と、その蔵書を継承した廣瀬文庫の存在意義は極めて大きいと言える。廣瀬文庫は九州大学の蔵書の基盤となり、寄託契約時に第2代附属図書館長の長壽吉（1880～1971）が図書の安全を確約していたように³⁶、戦災からも守ることができた³⁷。

しかし、別置されずに混排されていた他の文庫群と同じく³⁸、戦後になると文庫の中にどのような図書があるのか忘れられ、書庫の中に埋没してしまい、それ故に紛失の憂き目にあった図書もあった。本稿で紹介した『背振山塚図』のような極めて歴史的価値の高い絵図すらこれまで研究や展示会等で活用された形跡がなく、今後専門家により検討さるべき文献は数多い。目録の整備や電子化等による情報発信が課題である。

現在進行中の九州大学のキャンパス移転は、福岡の学術・文化・文物にとって、維新时期や戦時下に匹敵する大きな転期であるが、それら激動の時代を生き抜いた廣瀬文庫は、これまでの、そしてこれからの福岡のあり方を考えるうえで、大きな手がかりを提供するものと思う。

〔附記〕今回の調査にあたっては、附属図書館の皆様のほか、下記の皆様に大変お世話になった。記して御礼申し上げる次第である。

出雲大社福岡分院

九州歴史資料館

小林茂氏（大阪大学名誉教授・大阪観光大学）

佐伯弘次氏（人文科学研究院）

佐賀県立図書館

高野信治氏（比較社会文化研究院）

田中由利子氏（比較社会文化学府）

服部英雄氏（比較社会文化研究院）

福岡県立図書館

福岡市博物館

森田千恵子氏（大木町図書・情報センター）

八嶋義之氏（福岡市博物館福岡市史編さん室）

（以上五十音順）

参考文献

- [1] 廣瀬玄銀編『八雲会歌集』, 1904
- [2] 『福岡県案内』福岡県協賛会, 1910
- [3] 内務省地方局編『地方改良実例』, 1912
- [4] 『福岡県碑誌』筑前之部, 大道学館, 1929
- [5] 山中立木編『光雲神社々誌』報古会, 1930
- [6] 『福岡県立図書館郷土志料目録』福岡県立図書館, 1931
- [7] 『閩史筌蹄筑前郷土誌解題』福岡県立図書館, 1933
- [8] 『脊振村誌』脊振村役場, 1958
- [9] 『益軒資料』五, 九州史料刊行会, 1959
- [10] 井上忠『貝原益軒』, 吉川弘文館, 1963
- [11] 筑紫豊『秋月が生んだ明治の文化人江藤正澄の面影』秋月郷土館, 1969
- [12] 『佐賀県立図書館蔵古地図絵図録』佐賀県立図書館, 1973
- [13] 川頭芳雄『脊振山と栄西；大潮と売茶翁』佐賀県郷土史物語第1輯, 1974
- [14] 『黒田資料図録』福岡市美術館, 1979
- [15] 川添昭二, 福岡古文書を読む会校訂『新訂黒田家譜』文献出版, 1982
- [16] 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院, 1984
- [17] 小松和博『江戸城—その歴史と構造—』名著出版, 1985
- [18] 村井益男責任編集『江戸城』日本名城集成, 小学館, 1986
- [19] 海妻甘蔵著, 広渡正利校訂『筑前人物遺聞』文献出版, 1986
- [20] 『福岡県史』近世史料編福岡藩御用帳（一）, 福岡県, 1988
- [21] 西村天因著, 菰口治校注『九州の儒者たち：儒学の系譜を訪ねて』海鳥社, 1991
- [22] 平井聖監修, 伊東龍一編著『城郭・侍屋敷古図集』江戸城1, 至文堂, 1992
- [23] 『脊振村史』脊振村, 1994
- [24] 『佐賀県近世史料』第1篇第3巻・第8編第3巻, 佐賀県立図書館, 1995・2007
- [25] 小林茂ほか編『福岡平野の古環境と遺跡立地：環境としての遺跡との共存のために』九州大学出版会, 1998
- [26] 『黒田家文書』第1巻本編, 福岡市博物館, 1999
- [27] 『ふくおか歴史散歩』第6巻, 福岡市, 2000
- [28] 『筑肥国境脊振山争論文書』九州大学出版会, 2001
- [29] 『大工頭中井家建築指図集—中井家所蔵本一』思文閣出版, 2003
- [30] 鳴海邦匡『近世日本の地図と測量：村と「廻り検地」』九州大学出版会, 2007
- [31] 『市史だより』10, 福岡市博物館市史編纂室, 2009
- [32] 杉本史子ほか編『絵図学入門』東京大学出版会, 2011
- [33] 『九州大学百年の宝物』丸善プラネット, 2011
- [34] 『新修 福岡市史』近世1領主と藩政, 福岡市, 2011
- [35] 『新長崎市史』第2巻近世編, 長崎市, 2012
- [36] 『佐賀藩長崎警備のはじまり展』鍋島報効会, 2012

¹ 私立福岡図書館と廣瀬文庫については、筑紫豊「私立福岡図書館館史」（『図書館学』6, 1958）、「広瀬資料（私立福岡図書館関係資料）の寄贈」（『福岡県立図書館報』8, 1985）, 三池賢一「廣瀬文庫資料1～7及び附」（『ふるさとの自然と歴史』215, 1989）, 伊東達也「（私立）福岡図書館についての一考察（1）」（『図書館学』86, 2005）, 同「（私立）福岡図書館についての一考察（2）—廣瀬玄銀の図書館観—」（『図書館学』88, 2006）, 案浦浩二「縁結びの神様と図書館」（『九州経済調査月報』64, 2010）, 拙稿「廣瀬文庫—私

立福岡図書館旧蔵書一』（『九州大学百年の宝物』丸善プラネット、2011）を参照。

² 廣瀬文庫に関する目録は下記の通りである。

A『福岡図書館図書目録』甲号天地2冊・乙号乾坤2冊（廣瀬文庫）
明治末年の福岡図書館の蔵書目録。寄託図書には「宗」等朱筆により所有者を示す書き込みがある。

B『福岡図書館和漢書目録』7冊（廣瀬文庫）

大正初年の福岡図書館の蔵書目録。Aより体裁は整うが、寄託図書の所有者を示す書き込みはない。「九大コレクション」貴重資料で公開されている。なお、福岡図書館の蔵書数は7万冊を越える規模を誇ったが、その多くが閉館時に売却ないし寄託者に返却され（1918年開館の福岡県立図書館の基幹図書になったとも伝わるが、今のところそれを裏付ける資料が見つかっていない）、残った蔵書約1万冊が、廣瀬玄振十年祭の日にあたる1925年12月1日に、九州大学に寄託された。ただし、寄託された廣瀬文庫には、廣瀬家の個人蔵書など、福岡図書館旧蔵書以外の図書も多数含まれている。

C『廣瀬文庫書目録』

九大への寄託・売却の際の仮目録。1942年の寄託延長時に寄託図書が追加されるが、その目録も含まれている。書名・点数のみの棒目録だが、Fに記載されていない書名も含まれており、冊数は10833と計上されている。ただし、複数の図書を一つにまとめるなど、かなり簡略化されて記載していることがあるため、実際にはこの冊数より多い。『寄託図書ニ関スル書類』に綴じられている。

D『廣瀬文庫假目録』

基本Cと同じものだが、1942年の追加分は含まれていない。不明図書の情報など、様々な追加情報が書き込まれている。利用者用に製本され、「九大コレクション」貴重資料で公開されている。

E総合目録カード（中央図書館学内総合目録Aグループ）

寄託されて間もなく、廣瀬文庫は整理されて通常の受入図書と同様に総合目録カードも作成された。書名・著者名・出版事項・形態・大きさ・冊数・枚数・巻数・分類（請求記号）・備品番号（元々は廣瀬文庫の通し番号が記載されていたが、戦後に売買契約が成立して九州大学の蔵書として受入れられると、備品番号に置き換えられた。後述の『経絡及骨度之図』のように受入手続きができなかったものは廣瀬文庫の通し番号が記載されたままになっている）等が記載されている。ただし、和書の総合目録カードは書目録なので、廣瀬文庫のみを抽出したカードはない。図書現物に、「廣瀬文庫」の朱印と廣瀬文庫の通し番号（1925年寄託分は朱色、1942年寄託分は紺色）が捺され、請求記号ラベルが貼付されたのも、この整理時である。総合目録カードは「目録カード画像検索システム」により公開されている。

F『九州帝国大学附属図書館原簿』

戦後の昭和22～23年度に売買契約が成立した際、受入手続きが完了した図書2045部10804冊は『九州帝国大学附属図書館原簿』に記載された。備品番号・書名・数量・金額・受入日・納入者等が記載されている。ただし、この時に偶々図書現物がなかったなどの理由で受入手続きができなかったものは記載されていない。

この図書原簿の情報にEの総合目録カードの情報を追加した目録データを、「九大コレクション」貴重資料で公開している（旧所蔵コレクション目録データベース上で公開していたもの）。

『九州帝国大学一覽』等には廣瀬文庫に洋書107冊が含まれていることが記載されているが、これらの目録には全く記載されていない。図書現物は保存書庫の未整理資料群に含まれており、一部和書も確認できる。図書の中に廣瀬文庫の通し番号が付与された目録カードが挟み込まれているものもあり、寄託後に整理しかけた形跡がある。

以上のように、廣瀬文庫全体を網羅した目録は存在しない。Fを元にEの情報を追加したものが公開されているが、C・D・Eの情報により、Fに記載されていない図書の情報を抽出し、また、洋書のように図書現物しかないものの情報を追加することにより、廣瀬文庫の全体像を復元することが可能となる。

なお、NACSIS-CATへの登録については、洋装本はほぼ完了しており、和装本は唐本のみ完了し、和本・朝鮮本は完了していない。残念ながら、不明図書など既に登録できないものもある。データ登録以前の不明図書は、これら紙媒体の目録によってでしか存在を確認することができない。

³ 1991年4月26日に同じ箱に入っていた『寛文年間福岡士官宅地

之図』を調査された小林茂氏のご教示によれば、その時には既に『肥州長崎図』はなかったとのことである。

⁴ 背振山国境争論についての最近の研究に、服部英雄「元禄の筑前・肥前国境争論地—二重平・篠平・ウオセキ」（『地方史ふくおか』41-2, 2007）、同「国境の村々・五ヶ山の歴史」（『福岡県文化財調査報告書』215、福岡県教育委員会、2008）、田中由利子「近世領土の「国境」認識—黒田・鍋島の脊振弁財嶽国境争論から—」（『比較社会文化研究』24, 2008）、同「脊振弁財嶽国境争論にみる国絵図と地域信仰」（『福岡地方史研究』48, 2010）、同「脊振弁財嶽国境争論と鍋島氏」（『財団法人鍋島報効会研究助成研究報告書』5, 2011）、同「近世国境争論にみる佐賀藩領主と地域信仰—脊振弁財嶽国境争論を素材として—」（『地方史研究』61-6, 2011）等がある。なお、背振山の表記は現在「脊」を用いるが、『背振山塚図』の「背振山上宮弁才天」等江戸時代の文献が専ら「背」を用いていることから、本稿では「背」に統一し、参考文献等で「脊」を用いているものはそのままにした。

⁵ なお、肥前の絵師玄偈は永松玄偈（佐賀藩六代藩主鍋島宗政のお抱え絵師永松秀精の父）のことで、佐賀市重要文化財「与賀神社縁起図」（延宝6年寄進、与賀神社所蔵）の作者であり、同じく玄偈作の「涅槃変相図」（普明寺所蔵）は相絵図を作成する前の元禄5年正月に完成している。竹下正博「涅槃変相図」（『佐賀県立博物館・美術館報』87, 1990）、福井尚寿「与賀神社と本庄神社の縁起絵」（『佐賀県立博物館・佐賀県立美術館調査報告書』29, 2005）を参照。

⁶ なお、公判で使用された山形は、双方の主張する国境線の間が白く塗られていたという。

⁷ 『黒田資料図録』（福岡市美術館、1979）による。後述の『筑前国肥前国境取替際絵図』も同じ。

⁸ 川村博忠「元禄国絵図の調製と国境整備—筑前福岡藩の場合—」（『歴史地理学紀要』17, 1975）を参照。

⁹ 小林茂・佐伯弘次・磯望・下山正一「福岡藩作製の元禄期絵図にみられる地磁気方位」（『地図』30（3）、1992、後『福岡平野の古環境と遺跡立地』に「福岡藩の元禄期絵図の作製方法と精度」と改題して収録）、宮崎克則「九大付属図書館にある天和二年「御国絵図」の来歴について」（『市史研究ふくおか』2, 2007）、西田博「近世福岡・博多の歴史地理資料」（『市史研究ふくおか』3, 2008）を参照。

¹⁰ 廣瀬文庫の江藤正澄旧蔵本は100部に及ぶ。江藤所蔵の主な古器物・古書籍は伊勢の神宮徴古館や大宰府天満宮に奉納されたが、福岡図書館にも相当数寄贈したことが窺える。

¹¹ 江藤の蔵書目録である『江藤内文庫書籍目録』（明治31年9月製、『随神屋所蔵目録』と合綴）の「黒田家関係書類部」や、『随神屋蔵書目録』（明治39年4月改正、いずれも附属図書館所蔵江藤正澄関係資料）の「黒田家関係」には、書名の下に「宇都宮伝本」と旧蔵者が記載されているが、黒田家旧蔵のものは見受けられない。

¹² URL: <http://hdl.handle.net/2324/403146>

¹³ 本稿執筆中、福岡市博物館福岡市史編纂室により、これまで未整理であった附属図書館所蔵大野家文書の調査が行われ、その中から、福岡藩が所蔵していたと思われる絵図の目録（620/オ/3-190）が見出された。末尾に「明和九辰（1772）年二月四日」とあり、また別に、末尾に「明和元（1764）年申七月四日改之」とある「御挟箱二入御感書箱之入目録」（620/オ/3-116）も見出され、明和期は福岡藩の記録仕法改革により、体系的な記録管理が導入された時期とされており（江藤彰彦「福岡藩における記録仕法の改革」『西南地域の史的展開』近世篇、思文閣出版、1988）、どのような目的で作成された史料か興味深い。この目録には、天和二年『御国絵図』等の国絵図以外にも、元禄六年『背振山論所御裁許之絵図』等、現在黒田家文書に所蔵される国境絵図が多数記載されているが、『背振山塚図』と思しき絵図は見出せない。収録対象や史料の性格も不明確であり、この目録に記載されていないからといって、直ちに『背振山塚図』が藩ないし黒田家由来ではないとは言えないが、それ以外の伝来の可能性も考慮すべきであろう。

¹⁴ 黒田家の資料については、『福岡県史』近世史料編福岡藩御用帳（一）（福岡県、1988）、『黒田家文書』第1巻本編（福岡市博物館、1999）を参照。

¹⁵ 浜の町の黒田家別邸にあった記録類については、附属図書館所蔵『黒田家御記録目録』（明治45年3月2日木村此君・杉原正造調査）により窺うことができる。1947年5月印刷の九州帝国大学附属

図書館の罫紙を使用した写本を、1949年4月25日に、当時館長であった法文学部教授金田平一郎が寄贈したものである。なお、黒田家別邸については、大野満壽子「黒田別邸の四季」（『ふるさとの自然と歴史』338～340, 2011）を参照。

¹⁶ 出雲大社福岡分院と光雲神社の関係は深く、廣瀬文庫は光雲神社の社掌を務めたこともあり（『光雲神社々誌』、江藤正澄とともに西公園の開発に尽力した（橋詰武生『明治の博多記』福岡地方史談話会、1971）。『福岡図書館図書目録』には、寄託者を示す「光」という朱書きのある図書が散見され、それを福岡図書館の分類ごとに抽出すると、次のようになる。

- 【経書】『周官義疏』（唐本）33冊
- 【儒書】『回天詩史』2冊
- 【国文和歌】『三部抄之抄』3冊、『和歌七部之抄』8冊、『新後明題和歌集』4冊、『類字假名遣』7冊
- 【漢文詩】『考槃餘事』4冊
- 【字書】『正字通』（唐本）40冊
- 【伝記】『伝名將譜』（唐本）10冊
- 【本邦地理】『木曾路之記』1冊
- 【化学】『舎密便覧』14冊
- 【博物】総記生物人類学『絵図本草綱目彙言』（唐本）16冊
- 【機械工学】『渾発量地速成』（折本）1冊
- 【書習字本】『六書正譌』（唐本）5冊
- 【音楽唱歌】『謡曲内外二百番』8冊
- 【類書】『物品識名拾遺』2冊、『広益地錦抄』増補附録共20冊計17部176冊

これらは廣瀬文庫には所蔵されておらず、現物を確認していないので、「光」＝光雲神社かどうか確実ではないが、福岡図書館に別途『光雲神社文庫書目録』が所蔵されており、光雲神社の蔵書が福岡図書館に寄託されていた可能性を示している。なお、『光雲神社文庫書目録』も廣瀬文庫には所蔵されておらず、現在の所在は不明だが、九州歴史資料館所蔵の『光雲神社御蔵書目録』（福岡藩関係資料-A13, 諸家の蔵書目録等と合綴）に、光雲神社所蔵の福岡藩関係資料が記載されている。

¹⁷ 相島宏「国立国会図書館所蔵本蔵書印—その199—福岡藩」（『国立国会図書館月報』368, 1991, 後『国立国会図書館蔵書印譜』及び『人と蔵書と蔵書印：国立国会図書館所蔵本から』所収）を参照。また、福岡藩の蔵書印（「筑藩」等）の捺された附属図書館所蔵音無文庫『唐宋八大家文鈔』（万暦7年序刊）の1冊目末尾に、「明治六年癸酉四月福岡縣故脩飫館古本御拂下有之候付拜借候也 寺尾氏」、46冊目裏表紙に「明治六年癸酉四月於脩飫館求之 寺尾亨」とあり、明治6年に福岡県により売却された藩校修飫館旧蔵の『唐宋八大家文鈔』を、寺尾亨（寺尾壽の弟）が入手したことを示している。音無文庫は福岡出身の天文学者寺尾壽が、引退後に伊豆伊東の音無川畔の閑居で蒐集した天文学・国文学関係の図書を中心とするが（田村隆「音無文庫」『九州大学百年の宝物』、寺尾新『父乃書齋』）、寺尾家が福岡で蒐集していた図書も継承しているようである。なお、福岡藩の蔵書印の捺された図書は全国各機関に確認できるが、廣瀬文庫にも『古語拾遺』・『世説新語補』・『箋註蒙求』に捺されている。また、慶応3年に設置され、九州大学の淵源となった賛生館や、明治元年に設置された文武館等の藩校の旧蔵書も含まれている（『本草綱目』・『玉禱』）。以上の蔵書印は「九大コレクション」上で公開している。

¹⁸ 一号蔵に残されていた資料は、戦後に福岡県立図書館や福岡市美術館（後に美術資料以外は福岡市博物館に移管）に収蔵されたが、それ以前の1961年に京都の思文閣より黒田家旧蔵の福岡藩関係資料が売りに出されたことがあり、その内、『筑前国産物並絵図帳』は福岡県立図書館に、『筑前国統風土記拾遺』等13部44冊は九州大学九州文化史研究所に購入された（『思文閣古書資料目録』25（1961）、筑紫豊「黒田家古本騒動記」（『博多のうわさ』28-2, 1962）を参照。

¹⁹ 許斐友次郎「山崎杏雨と普山」（『福岡』34, 1929）を参照。

²⁰ なお、この石田惟之とその従兄弟枝吉順恒を主人公に、背振山国境争論を読み物風に描いたものに、後藤道雄「脊振山論舌戦二勇士」（『佐賀郷友』8-5～10, 1936）がある。

²¹ その他、筆者未見ではあるが、『背振山公事書物』なる新史料が、福岡市博物館第24回新収蔵品展「ふくおかの歴史とくらし」（2012年11月23日～2013年2月11日）にて出品されている。同館『収蔵品目録』27（平成21（2009）年度収集、2012）及び『九州の郷土誌

を中心とした西日本文献目録』49（葦書房、2005）によれば、元文5（1740）年以降写、墨付21丁、元禄5年11月15日に出された肥前側の記録であり、題簽には「背振山公事書物 綱錦堂秘書」とあり、旧鹿島藩主の鍋島直彬（1844～1915）旧蔵とのことである。

²² 福岡県立図書館所蔵「福岡県史編纂資料」（『福岡県近世文書目録』第一集所収）は、戦後回収された県立図書館の疎開資料に、明治期に福岡県史編纂に従事した長野誠（1807～1891）の自筆本・旧蔵書が多く含まれていたため、資料群をかく称したものと思われるが、実際には長野誠旧蔵書以外の図書も含まれている。『上野就賢覚書』・『福岡藩諸覚書』・『黒田家御道中諸記』・『美々の底』・『福岡県養蚕其他二関スル記録』等、上野就賢の自筆本もその一つで、いずれも『背振山境争論記』と同じ「寄贈／大正十年十二月廿九日上野端彦氏」の寄贈印が認められ、『福岡県立図書館報』29（1922.6.25）にも、県立図書館に上野端彦氏から91冊の寄贈があったことが記載されている。なお、長野誠旧蔵書については、私立福岡図書館が作成したと思われる『長野家保管書籍目録』が、廣瀬文庫とは別に、1931年に附属図書館に受入れられており（寄贈者は「無名氏」とあり由来は不明）、目録掲載図書の一部は、福岡県史編纂資料と重なっている。廣瀬文庫にも長野旧蔵の『赤間駅阿正伝』が収蔵されている。

²³ 井上忠『貝原益軒』（吉川弘文館、1963）によれば、幕府境目検使による現地の検分の際に、村の老翁として活躍した、あるいは炭焼夫として弁明したという言い伝えもあるという。海妻甘蔵『己百齋筆語』（『筑前人物遺聞』所収）にも益軒が百姓に交わって検使に応接したことが記載されるが、『背振山境争論記』によれば、元禄5年5月23日に、提訴の為に派遣された百姓達と共に江戸に到着していることは記録されているが、それ以外の益軒の関わりは記録されていない。

²⁴ 『古文書資料目録』10（福岡市総合図書館、2005）を参照。

²⁵ 『宗像神社史』下巻（宗像神社復興期成会、1966）を参照。

²⁶ 河窪奈津子「宗像大社所蔵文書と宗像大社中・近世史」（『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告』I, 2011）を参照。

²⁷ 岡寺良「寺院遺構からみた背振山上宮・東門寺跡と中宮・靈仙寺跡の研究」（『公益財団法人鍋島報效会研究助成研究報告書』6, 2014）を参照。

²⁸ なお、江藤正澄の蔵書目録である『随神屋蔵書目録』（明治39年12月製写、明治41年2月再修、江藤正澄関係資料）及び明治末年の『福岡図書館図書目録』には、「御天守百分一之圖」と記載されていたが、大正初年の『福岡図書館和漢書目録』には「福岡天守百分一之圖」と記載されており、福岡城の天守閣の図面と誤認されていたようである。

²⁹ 東京都立図書館デジタルアーカイブにて公開されている。

³⁰ 勝海舟『吹塵録』の「江戸御城御天守寸間其外細記」には「二重目南北 十六間二尺八寸 東西十三間六尺三寸」とある。

³¹ 佐藤正彦「福岡大工林とその仕事」（『学術講演梗概集 F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠』1992）によれば、「林助市矩貞」は、嘉永3（1850）年8月の筒崎宮能舞台建替や嘉永5年3月の宗像大社本社修造の棟札に棟梁大工として見えている。

³² 奥書に「大棟梁甲良豊前扣」とあり、豊前を称したのは、三代宗賀（1621～1717）あるいは四代宗員（1661～1733）であり、いずれかが写したものと考えられている。この奥書は、享保11（1726）年の袋書のある『御城内紅葉山惣絵図』の奥書「御作事方大棟梁甲良豊前扣」の筆跡に近いので、四代宗員の可能性が高いのではないかとと思われる。

³³ 諸室の構成や室や廊下などに描かれている画題と絵師が記入されている点では中井家文書「御城中御表向絵図」（『大工頭中井家建築指図集—中井家所蔵本—』所収）に近い。

³⁴ 元禄5年に岡崎藩主になった水野豊前守（忠盈）と、同年に隠居した松平市正（英親）が杵築藩主として見える。絵図に直接書くのではなく、紙で貼り付けたのは、藩主交代等で貼りかえられるようにという実用性を考慮してのことと思われるが、そのことは、本図も元禄5年までに作成された可能性が高いことを示している。

³⁵ 福岡図書館の旧蔵書には、福岡藩土と思しき蔵書印や書入れが多数見受けられる。寄託されていたものは、福岡図書館閉館時に返還された後に散逸したものもあり、1934年に大阪の鹿田松雲堂より附属図書館が購入した和漢古書群の中に、福岡図書館の蔵書票が貼付された江戸後期の福岡藩家老林直統の旧蔵書（『太平将士美談』・

『敬徳公遺事』・『克明抄』・『筑前国内秋月領分郷村高附帳』が含まれていた。一方で、福岡藩の漢学者である高橋楽地（1809～1874、名は知郷）や宗道遥（1824～1904、名は盛年）の旧蔵書のように、一旦寄託者に返還されながら、結果的に廣瀬文庫と同じ九州大学に収蔵されたものもある（楽地文庫・道遥文庫）。拙稿「旧制福岡高等学校蔵書」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2010/2011, 2011）を参照。なお、福岡図書館の個々の図書の由来を探る手段はいくつか残されており、蔵書印や書入れ等のほか、表紙に貼付された寄贈・寄託者名（ただし、剥がされていることが多い）、『福岡図書館図書目録』の寄託者を示す朱書き、『福岡図書館報』2・3号（1903～1904、福岡県立図書館所蔵）に収録された寄贈書の項（内訳として寄贈者名と冊数を記載）等があり、江藤正澄の旧蔵本については、前述のように江藤の蔵書目録に旧蔵者名や入手先が記載されていることがある。現在未確認の『福岡図書館報』1号には、開館時に寄贈された図書の寄贈者名等が記載されていることが推定され、発見されれば、福岡図書館の蔵書の成り立ちを明らかにする有力な資料となることが期待される。

³⁶ 「九大へ図書委託 福岡市の廣瀬氏 福岡市下の橋大社教分院 廣瀬玄愛氏は先考玄張[銀]氏が生前苦心蒐集した元福岡図書館所蔵の和漢洋図書一万巻を取纏め今般九大図書館に保管方を委託したが右図書中には古今図書集成三百余巻大蔵経二百五十巻武家式目抄六十巻四庫全書総目七十余巻洋書百余巻を始め巷間では容易に得難い和漢各種の珍本等写本郷土資料等が多いので九大図書館では大喜びで全部取纏め「廣瀬文庫」として一切を別書庫に蔵め鄭重に保管すると共に整理の出来次第同館内での研究者のために謁覽せしむる筈であるが右に関し同館長長壽吉氏は語る

廣瀬文庫の内容は図書が極めて広汎に亘り殆ど經史子集の全部に及んで居るがこんな貴重な図書を最近誰にも謁覽せしめないで束ねて蔵つて居たのは惜しい事であつたが今度全部本館に保管する事となつたので本館では非常に有り難いと思つて居る此図書中には通俗的な者もあるが大体に専門の者が多いので九大図書館の研究者には非常の利便を与へる事と思ふ。御覧の通り建物が全部絶対耐震耐火の建築になつて居て充分安全を保証し得る者であるし曝書其他に就ても本館は責任を以て之に当る筈であるから本館に寄託さるれば木造の普通家屋に蔵せられるやうな不安は絶対にない事であるが創立早々かう蔵書家の寄託書が増すことは大変喜ばしい事で御蔭で研究上の利便を得る事が多いので深く感謝して居る次第である。どうか各方面に亘り貴重な図書を秘蔵せられて居る方々は之を公開して研究を援助する意味に於て保管を本館に寄託せられる事を切望する次第です」（『福岡日日新聞』大正14年12月23日）。

なお、長壽吉はこの2年前の関東大震災で父長三洲から継承した咸宜園先賢の自筆稿本・手沢本を含む蔵書が丸焼けになつており、当時の蔵書家の災害への危機意識を痛いほどわかつていた。

³⁷ 戦時下での附属図書館における図書の疎開については、柴田篤「文学部所蔵「武内文庫」の謎を追って一楠本正継図書館長とその時代一」（『図書館情報』40-3, 2005）を参照。

³⁸ 拙稿「忘れられた文庫たち—中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群—」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2008/2009, 2008）を参照。

参考：現在の背振山



背振山頂の上宮弁財天と航空自衛隊レーダーサイト

背振山頂から見た係争地

幕府裁定後の元禄10（1697）年に佐賀藩により建立された石宝殿と石灯籠が残る



附図1 廣瀬文庫『背振山塚図』



附図2 黒田家文書『背振山論所御裁許之繪図』（福岡市博物館所蔵）